
午前 6 時の校門で。

柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午前6時の校門で。

【Nコード】

N 8 2 4 1 P

【作者名】

柚子

【あらすじ】

午前6時。

犬アレルギーなのに、犬にこれでもかと追いかけられる少女は、近所のゴールデンレトリバーを避けるためいつもより早起きして登校した。

しかし、そこで待っていたのは……？

頭にはつと浮かんだ超短編ストーリーです。

ピュア100%です。

イメージ画像置いてます。よかつたらどうぞ。

↓ <http://2350.mitemin.net/i172>
95/
<http://2350.mitemin.net/i172>
97/

「はあっ、はあ…」

閑静な住宅街に、マフラーをたなびかせて全力疾走する女子高生が一人。

高校生にしては小柄な彼女の後ろには、ワンワンと吠えながら走るラブドールレトリバーが一匹、獲物を見つけたといわんばかりに少女を追いかけている。

「いやあー！なんで、追いかけてくるんですかあーっ」

「ワンワンッ」

少女は少女の体にぶつかって揺さぶられるスクールカバンを走りながらきゅっと持ち直し、見えてきた路地の角を右に小さく曲がる。

2メートル程離れていた後ろの犬は、とっさの彼女の行動に反応が遅れて、大きく曲がってしまい彼女との距離がひらく。

ひいー怖いです！

少女は背後を見るヒマもなく、ただ前だけを見つめて両手と走りにくいローファアーを一生懸命前後に動かした。

―あと少しで、校門が見えるはず。

そうすれば、この時間なら誰かしらいるから、助けてもらいましょう！

ドクドクと激しく音打つ心臓に、酸素をほつり込むと、痛いほど冷たい冬の空気を感ずる。

何故私は、12月というこの寒いときに、怖い犬（しかも大型犬）と追いかけてこをしくちやいけないんでしょうか。

顔面なんて、冷気で赤くなってヒリヒリする。

これでは折角昨日念入りにクリームをぬったのにもう力サカサだ。

今日はついてないです。

見えてきた学校の校門に誰か助けてくれる人がいないかと期待を寄せる。

すると、うつすらと人影が見える。

しかし、走るため邪魔だと抜きとった眼鏡がないので男か女か分からない。

―すぐ後ろには鼻息荒く私を待つ猛獣がいる。

うー、女は度胸です！

このまま立ち止まれば、私はひどいくしゃみなどのアレルギーを起こす事になり、挙げ句の果てには小学生の時の悪夢を蘇えさせることになる。

男か女なんて関係ない。

困った時はお互い様です。
だから、

「助けてください、見知らぬ人ー！私、犬苦手なんですーっ
！！」

数メートル先にいる人影に最短の言葉で現状を叫ぶ。

すると校門にいた人は、両手を広げた。

私の胸に飛び込んで来なさいって事ですか？

一瞬頭に浮かんだ疑問を振り払って、思いっきり足を踏み切ってその人の胸へと飛び込んだ…。

ボスンッ

すっ飛んで来た私は、見知らぬ人に抱き抱えられるようにして小さ

くなっていた。

「きゃうん」

犬は私が高い場所に行つてしまい諦めたのか、悲しそうな泣き声をあげて走り去って行く音がした。
ふう。これで一安心です。

「あの…、ありがとうござ…」

お礼を言つべく、上を見上げると、言葉を失ってしまった。

だつて、私を見下すその人は。

……男だったから。

しかも、校内で、

「無口無表情話しかけると睨まれる」

と恐れられている男子生徒の、「ヤンキー三鷹」だったのだから。

神様、今日は本当についてないようですね。

！
その日俺は、所属している剣道部の朝練で、早い時間に学校に来ていた。

この時間帯はあまり生徒がいないのでほっとする。
何せ、俺の顔を見た者は皆半泣きになりながら逃げていくからだ。

自分の顔を見て泣かれたら俺だって結構傷つく。

なのに奴らは、落とし物を渡してやれば、
「お手を煩わしてしまいすみませんでした！」と半泣き状態で去っていく。

話しかけられてどう返事をしたらいいのか考えていたら無視されたと誤解される。

そして、ついに付いたあだ名が『ヤンキー三鷹』。

誰がヤンキーだ。

ヤンキーは剣道で爽やかな汗をかかないだろうが。
いや、でも、雨に濡れた子猫を拾っちゃうような、ヤンキーが優しい！みたいな行為をした事はある。

だがしかし！断じて俺はヤンキーではない。
髪は真っ黒で短髪だし、暴力だってふった覚えはないぞ！

そんな俺の意思もむなく、本当の俺を理解してくれるのは同じ剣道部の奴らだけである。

しかし、彼らは俺が恐れられているのを面白がって噂を消すのは手伝ってくれない。

はんつ、友情とはなんと儂いものか。むしろ友達でもないのかもしれない。

なかば自暴自棄になって学校の閉まっている門を開く、と同時に女の子の悲鳴が聞こえた。

「助けてください見知らぬ人！私、犬苦手なんですー！！」

この場所には、俺一人しかいない。

振り返ると俺の視界には、半泣きの可愛い少女がいた。

こちらに腕を伸ばして全速力で走っている。

その必死な少女の後ろには、鼻息を荒くして涎をしたらせているゴールデンレトリバーがいた。こちらも目が血走っていて、必死だ。

確かにアレは怖いな。

恐怖でガチ泣き寸前の少女を助けるべく、俺は両腕を広げた。

その瞬間、少女が、

……跳んだ。

ボスンッ

少女は自分自身を荷物のように小さくして、俺の腕の中にしっかりとおさまってしまった。

「きゃうん」

俺のところに少女が行ってしまい興味をなくしたのか？
違う。ゴールデンレトリバーは俺の顔を見るなり鳴いて逃げ去ったのだ。

おい。俺の顔は犬にさえ怯えられる程怖いのか？

…すみません。まじで泣いていいですか？

結構動物好きな俺。

小動物が一番好きだが、小さい時に怯えられた経験があるので期待はしていなかったが、まさか人懐っこいゴールデンレトリバーにまで嫌われるとは。

うつらうつらと考えていると腕の中の物体がもそもそと動く。

はっ、そういえば俺は少女を抱っこしていたのだ。

あまりにも動物に受けたショックは大きいらしい。

少女は栗色の頭を上げると、長い睫毛をふせながら俺に言った。

「あの…、ありがとうござ…」

しかし、お礼を言いながら目を上げた少女は俺と視線が会った途端、びくつと震えた。

…ああ、またか。

俺に向けられたのは、恐怖に打ちひしがれる目。

―チクン。

俺なんかに助けを求めてくれたから、少しは受け入れてくれる人か
と思っていた。

けれど、結局俺は、

恐れられるしかないみたいだ。

今だ震える彼女を出来るだけ優しく地面に下ろしてやる。

いきなり下ろされて驚いたのか、大きな茶色の瞳で俺を見上げる少

女。

可愛い、俺の大好きな小動物みたいな少女。

けれど少女は俺に怯えている。

―チクン。

どんなに人助けをしても。

よかれとしたことも、全部。

全部裏目に出て、怯えた目で見られる。

そして、その目線は俺の心臓にチクチクと穴を開けていく。

どうして、上手くないんだろっな。

悲しい？そうかもしれない。才能はおろか、自分自身を受け入れてもらえないのは辛い。

ああ、でもこの女の子は途中までだけど、ありがとうと言ってくれたんだっけ？

ありがとう。

それは俺に対しての最高に優しい言葉。

怯えながら言ってくれた彼女にせめてお礼を言わせてよ。

「…どう、いたしまして」

精一杯言った返事は、いつもと同じように低く冷たい声になってしまった。

ここまで来ても変わってくれない俺の全て。

悔しくて、情けなくて、悲しい。

ああ神様。

どうか、俺が言った言葉くらいは、ちゃんと届けさせてください。

――
「どう、いたしまして」

私を助けてくれた、「ヤンキー三鷹」と呼ばれる青年は、悲しそうな顔で、そう、言った。

あまりにも、悲そうに歪められた端正な顔。

その表情の奥に見え隠れしている感情は、苦しみの色。

―無表情？無口？話しかけると睨まれる？

一体私は、彼本人に直接会った訳でも、話した事もないのに、こんな噂に流されていたのでしょうか。

彼は。

彼はこんなにも、

―どう、いたしまして。

優しかったのに…！

「待つてくださいつ！」

気がつけば、私に背を向けて去ろうとしている彼を呼び止めていた。

振り返った彼は、無表情で感情がよく分からないが、怒ってはいないようだった。

急いで、彼の方まで走り寄ると、彼の形の良い眉がぴくりと上がった。

思わずそれに震えてしまう。

…呼び止めたのは、迷惑だったのでしょうか。

ううん。

もし、そうだとしても、私は、この人に伝えなければならない。

「あのっ…、私、えと、ずっと、三鷹くんは怖い人だと噂を鵜呑みにしてたけど…」

—どうか、神様。

悲しみに染まった彼の心に、ちゃんと届けてください。

「…今は、ちゃんと優しい人だって分かりました」

あなたの事を怖い人だと勝手に誤解していたこと。

「あ、あと、助けてくれて、ありがとうございました!」

そして、いきなり飛んで来た私を優しく受け止めてくれたこと。

どうして、あなたに伝えなきゃいけないと思ったのか分からない。

けれど、悲しみに揺れたあなたにどうしても笑ってほしくて。

冷たい12月の風が2人の間を通り抜ける。

やはり、迷惑だっただろうか、頭いくつ分か大きい三鷹くんを見上げると、目を見開いて驚いた表情で私を見ていた。

「…あ、えと、すいま」

「…ありがとう」

「え…」

調子に乗ってすいませんと言おうとしたら、三鷹の低くい心地好い声が遮った。

彼は、無表情が嘘だった様に、綺麗に笑っていた。

かっこいい…。

無意識に彼を見ていたら、大丈夫か？と耳元で聞かれていた。

「はっ！いや、あの、三鷹くんって笑うとかっこいいなと…」

「…え」

「あ、いや、す、すいませっ…」

「…っ」

午前6時の校門前。

2人して顔をそらした、彼らの真っ赤な頬は、冬の寒さで染まった訳ではないようだ。

— E n d —

（後書き）

ありがとうございました。

誤字・脱字がありましたら、ご気軽に言ってください。

ちなみに、感想・文句・その他、絶賛受付中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8241p/>

午前6時の校門で。

2011年10月8日12時14分発行